
異世界で生活するには

悠久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で生活するには

【著者名】

IZUMI

【作者名】 悠久

【あらすじ】

異世界モノです。

主人公が異世界に飛ばされる所から物語は始まります。

処女作ですので、至らぬところがあればご指摘お願いします。
また、更新は不定期になると思います。

プロローグ

俺の腕の中に少女がいる。

少女の表情は驚愕に染まっている。

「どうして・・・」

少女は咳いた。

俺はその咳きに答えようとして、出来なかつた。

俺の胸のあたりに大きな穴があいているのだ。

そこから血がどんどん溢れてくる。

こりやあ死んだなあー、なんて思いながら、今にも泣きそうな顔をしている少女を安心させてやろうと笑みを浮かべた。

少女は俺に何か言つていいようだつたが、聞き取ることもできずに意識が闇に沈んでいった。

朝。

俺は、幼馴染の紀野結城と一緒に登校中だ。

「悠利、最近ぼーっとすること多いけど、何があった?」

「なんだよいきなり。 心配してくれたのか?」

そう尋ねると、結城は顔を赤らめながら言つた。

「そ、そんなわけないじゃない!……でも、なんだか気になっちゃつて」

結城は相変わらずツンテレだなあ、なんて考えながら、

「そつか。でも、気にするよくな」とは何もないよ。安心して、

俺は結城の頭を撫でた。

結城は俺よりも身長が頭一つ分低く、手を乗せるのにひびき良い位置に頭がある。

結城は顔を赤くしながら、俺にされるがままになつていてる。

「そろそろ行こうか。このままだと遅刻する」

そう言い、結城の頭から手を離すと、結城は名残惜しそうに俺の手を見つめていた。

放課後。

今日は授業は午前中だけだったので、午後は授業はない。クラスメート達はこれから遊びに行く相談をしていた。

俺はさっさと帰る準備をして席を立つた。

教室を出て玄関に向かっていると、結城がやつて来て言つた。

「一緒に帰ろう？」

「すまん、今日はバイトがあるから一緒に帰れないんだ」

俺がそう答えると、結城は残念そうに

「じゃあまた今度ね」

なんて言つてきて、俺はそれに頷いてバイト先である喫茶店へ向かつた。

バイトが終わり、帰路についた。

ついでに晩飯の買い物をして、家へと続く道を歩いていると、突然目の前に黒い球体が現れ、俺を呑みこんだ。

「な、なんだ！？」

俺は思わず叫んだ。

だが、叫んだだけでどうにかなるわけでもちろんなく、意識を失つてしまつた。

プロローグ（後書き）

誤字・脱字、その他あればマーク指摘お願いします。

田覚めたら森

田覚めると、俺は森にいた。

「何で俺は森にいるんだああ～！！」

とりあえず叫んでみた。そしてすぐに後悔しました、しまくりましたとも。

背後の草むらからゲームに出てくるスライムのような生き物が出てきたのである。

十匹程が俺の周囲を囲むように出てきたため、逃げることもできない。

どうする…どうするよこれ…？

とりあえず、足元に落ちていた木の棒を拾つて、構える。正面に陣取つている一匹のスライムが飛びかかって来たので、思いつきり叩き落とす。

すると、あつさつ倒れ、そのまま煙となつて消えていった。

「……弱い」

思わず呟いた。

スライム達は、俺の言葉に怒ったのか今度は同時に俺を攻撃してきた。

俺は、スライム達の攻撃をかわすことなく全員叩き落とした。というかかわす必要も無かった。当たつても全然痛くないのだ。

最初に俺に倒されたやつと同じよう、スライム達は煙になつて消えた。

「倒したはいいけど、何処なんだここのなんか見たこともない植物もあるし……ん？」

スライム達が消えた所に何か落ちている。

拾つてみると、それはお金だった。しかも日本円。

「スライムを倒したらお金が出てきた、ってことになるのか?なんか気持ち悪いな……まあもらつておくけど」
丁度所持金が無かつたので、全部拾つた。全部五百円玉だったの
で、所持金は五千円になった。

他にも何か落ちていたので、拾つてみると、

「……当たり券?」

なんでスライムから当たり券が出てくるんだ?何の券かわからな
いし……

裏を見てみると、『近くの町のお店で買い物をする時に提示して
ください。ただし、使えるのは一度だけです』と書いてあった。
『何の当たり券か書いてないしー近くの町つてどこにあるんだよー』
思わず叫ぶ。

すると、突然何かに肩を掴まれた。

「のわ!?」

ふり向くと、そこには銀髪で綺麗な少女が立っていた。

「こんな所で何しているの?」

少女に見惚れていた俺は、少女の問いで我にかえり、

「……俺、迷子なんだ」

正直に答えた。

木の棒で魔物を倒すのは非常識なようですが（前書き）

早速お気に入りに登録してくれた方がいました。ありがとうございます。

木の棒で魔物を倒すのは非常識なようですが

「迷子?」

少女は問い合わせてきた。

俺はそれに頷いて、

「そりなんだ。ここがどこかわからなくて困っていた所なんだよ。

君、ここがどこかわかる?」

俺が問うと、

「ここはラグリアのすぐ近くの森よ。」

少女は答えてくれた。

答えてくれたのはいいんだけど、ラグリア?聞いたことが無いな。外国の町だろうか?いや、少女が俺の言葉がわかるということは日本で間違いないと思うが……

とりあえず、町まで行ってみよう。

「申し訳ないけど、そのラグリアまで連れて行ってくれないかな?頼んでみると、

「別にいいわよ」

あっさりOKを貰った。

「そう言えば、自己紹介がまだだったね。俺は天神悠利、ユーリと呼んでくれ」

「よろしく、ユーリ。私はリリス・アドリシアよ」

歩きながら、お互いに自己紹介をする。

リリスの外見は、長い銀髪に紫の瞳、人形のよつて白い肌で、胸はけつこう大きい。

ストライクど真ん中、つて感じで俺の好みだ。

「リリスはラグリアに住んでいるのか?」

ふと気になつたので聞いてみた。

「さうよ。でも、最近魔物が増えているから迂闊に町の外にも出られないの」

……魔物？

そんなものが出でくるのか？

いや、さつきスライム倒したけど……しかし、日本はおろか、世界のどこの国でもスライムが人を襲つたなんて話は聞いたことが無い。

まさか、ここには異世界なのだろうか……いや、考へても答えは出ないな。それに、魔物が出ると囁つのならば、生き残る術を早急に見つけないと。

そう言えばわざと『当たり券』なる物を手に入れたわけだが、リリストに聞いたらわかるだろうか？

「そう言えば、リリストに会う直前にスライムを十四程倒したら『当たり券』が出てきたんだけど、これどうやって使うんだ？」

尋ねると、リリストは何言ってんだこいつは、とでも言つようつた顔をしながらも教えてくれた。

「ヨーリ知らないの？当たり券は買い物をするときにお店の人看見せると、その場で一つ商品をくれるのよ」

「すべての店に使えるのか？」

「ええ。武器屋でも防具屋でも道具屋でも、店ならどこでも使えるわ。でも、『当たり券』は魔物を倒さないと手に入らないの。あまり落とさないけどね」

「へえ、そなんだ。じゃあ俺は幸運だったわけだ」

俺がそう言つと、リリストは、

「ただし、魔物によつて当たり券のデザインが違うから、デザインに応じてくれる商品の良さが変わるので。残念ながら、スライムの当たり券で貰える商品はあまり上質では無いわね」

などと言つた。

「レアじゃないのか……」「ちょっと落ち込んだ。

もう少しで森を出られる、って所まで来た時に魔物と遭遇した。またスライムだった。

「こいつはまかせろ

そう言って、俺は持っていた木の棒であっさりと倒した……虚しい。

例によつてドロップしていくつた金を拾つて財布につつ込んでいたと、リリスが信じられない、とでも言つような顔をしていた。

「どうかしたか？」

尋ねると、リリスは驚きを隠せない様子で、

「倒したのがスライムとはいえ、木の棒で魔物を倒した人なんて初めて見た……」

などと言つた。

……これくらい誰でもできるんじゃないの?と思つたが、驚いていることから察するに今まで誰も木の棒で魔物を倒す、なんて事が無かつたのもしれない。

まあ、俺の場合、やるしかなかつただけだが……

氣をとりなおして、歩いていくと、街道に出た。少し歩いた所に町が見える。

「あれがラグリアか?」

尋ねると、リリスは頷いた。

「そうよ。ゴーリはラグリアに着いたら、買い物するんでしょ?案内してあげるわ

「そいつは助かる。」

さつきスライムを倒したから、所持金は一万三千程になつてはい

るが、少々心許無い。

早速『当たり券』の出番だな……

そう思いつつ、俺はリリスと一緒にラグリアへ向かって歩いていった。

木の棒で魔物を倒すのが非常識なようですが（後書き）

あまり長い文を書くのはまだできないので、短いのは勘弁してください。

最後に一言

……スライムは結構沢山お金を落としますね。

ラグリアの町

ラグリアに到着した……のはいいのだが、少々困ったことになつてゐる。

「あんちゃん、金よこせや」

町に入るとすぐにチンピラ三人に絡まれた。

……どこにでもいるんだな、こういう奴等……はあ。
早速町を案内してもらおうと思つていたのに……
リリスは完全に怯えてしまつてゐる。

「断る」

俺はリリスの前に進みながら、チンピラのリーダーっぽい奴を睨みつけて言つた。

「んだとコラア！！」

チンピラ達は激昂して殴りかかつて來た。

鈍い動きだつたので一人目の拳を屈み込んでかわしてアッパーでカウンター、その後に一人目の攻撃が來たので、足払いをかけて転ばせ、股間を蹴る。

最後の一人は鉄の棒で攻撃して來た。

振り下ろしで俺の頭に当たる軌道だつたので、距離を詰め、俺に直撃する寸前で体を横にズラす。

ギリギリで俺の横を通過する鉄の棒を横目に見ながら、残りの距離を詰め、チンピラを投げ飛ばした。

三人とも氣絶してしまつていたが、放つておくことにした。

リリスの方を見ると俺を見て驚いていたが、安堵したような表情を浮かべながら、

「ユーリって強いのね」

なんて言つてくるから、俺は照れてしまいながら、「ユーリ、これ位どうつてことは無いよ」と言つた。

気を取り直してリリスに町を案内してもらひことにした。ラグリアは結構大きな町のようで、店の商品も充実しているようだ。

俺はリリスに連れられ、武器屋に入った。

「いらっしゃーい、つてリリスちゃんじゃないか。彼氏とトートかい？」

武器屋のおっちゃんが言うとリリスは顔を赤くし慌てながら、「そもそもそんなわけ無いじゃありませんか、リカルドさん」そこまではつきり否定されるとくつむ……

「なんだ、違うのかい。……で、その小僧は誰だ？」

……小僧じゃないっての、口には出さないが悪態をつきながら自己紹介をした。

「俺は天神悠利、近くの森で迷っていたところをリリスに助けられてここまで連れてきてもらつたんだ」

「お前さんその年で迷子になつたんかい。情けないねえ」

ムカツとした。

「仕方ないだろ？　目が覚めたら森の中にいたんだから」

俺がそう言つと、リカルドと呼ばれた武器屋のおっちゃんがすまなそうに、

「そいつはすまねえ。お誂びに何か買つんだつたらちょっとだけ値引きしてやるよ」と言つてきた。

俺の所持金はそんなに無いため、その申し出は有難かつた。

「じゃあ何か買つことにするよ。……ああ、忘れてた。当たり券あるんだけど使えるか？」

「ああ、使えるよ」

「スライムが落としたやつなら、何をくれるんだ？」

「スライムの当たり券だな……それなら、この『銅の剣』なんかど

うだ？」

銅の剣か……どうせなら刀の方がいいな……

「刀は無いのか？」

俺がそう言うと、リカルドは、「有るには有るが、スライムの当たり券じゃダメだな」と言つてきたので、値段を聞いてみることにした。

「刀はいくらだ？」

「七千八百円だな」

安い！？めちゃくちゃ安いよ…？それで大丈夫なの！？

「じゃ、じゃあ銅の剣は？」

念のために聞いてみると、

「三千一百円だ」

「うちの方が安かつた！！それで良いのか武器屋……俺は当たり券で銅の剣を、現金で刀を買つことにした。

武器屋を出ると、リリスが聞いてきた。

「何で武器を一つ買つたの？」

「一刀流やつてみたかったんだよね。それにいつまでも木の棒じゃ駄目だろうし」

「木の棒なんかで魔物を倒そうとするのつてコーリだけだよ」

リリスに呆れられた。

その後も町を案内してもらつた。

防具は動きズラくなりそうだったので、コートとブーツだけ購入し、道具は野宿に必要だと思われるものを買い集めた。
おかげでスッカラカンになつちました。……どこにも泊まれない

俺が今夜の寝床をどうしようか悩んでいると、リリスが提案して来た。

「良かつたら、私の家にしばらく泊まる？」

「いいのーー?」

「だつて、もうお金無いんでしょ?」

そこを突かれると痛い。

「じゃあよろしく頼む」

俺は、リリスには世話になつてばかりだな、と思ひながらも、
リリスの厚意に甘えることにした。

ラグリアの町（後書き）

進行遅くてすみません。

襲撃（前書き）

主人公のチートが発動します。

リリスに連れられ歩くこと十分。町の外れの方に来た。

「この辺にリリスの家が有るのか？」

尋ねると、リリスは領きながら、

「そうよ。稀に魔物がここまで侵入してくれることがあるけど、自警団の人気が退治してくれるから安心して暮らせるわ」

自警団の人人が頑張つているおかげでこの辺も概ね安全なのか……

考えながら歩いて行くと、あまり大きくはない一軒家でリリスが

立ち止り、

「さあ、着いたわよ」

そう言つて、リリスは扉を開けた。

「お邪魔します」

言いながら、リリスに続いて家の中に入ると、リリスの両親と思われる人たちがリリスが帰つてくるのを待つていたようだ、

「おかえり、リリス。おや、その子は誰だい？」

「ただいま。お父さん、お母さん。この人はユーリ、森で迷子になつていたから連れてきたの」

「はじめまして、天神悠利です。よろしくお願ひします」

俺はリリスの両親に向かつて挨拶をした。

「私はルード・アドリシア、こつちは妻のアリシアだ。よろしく、
ユーリ君」

自己紹介も終わり、俺を交えて料理を食べた。

時間的には夕食になるんだろう。

食事が終わり、少ししてから、それは起きた。

家の扉がドンドン、と叩かれ、ルードさんが扉を開けると、そこには自警団だと思われる人が、血まみれで立っていた。

自警団員は慌てた様子で言つた。

「逃げてください！！」

「落ち着いて、何があったのか話してください」

ルードさんがそう言うと、自警団員はこう言つた。

「町に七十を超える魔物の大群が押し寄せてきました！！直ちに避難してください」

この町に魔物と戦うことができる人は五十人程いるとリリスから聞いていたが、七十四の魔物を相手にするには少し荷が重いと思った。

結局、ルードさん達と一緒に避難することにした。

そして走ること三十分。町の中心にある避難所にたどり着いた。すでに避難所にいた人たちとは、皆一様に暗い表情を浮かべている。俺は焦燥感に駆られていた。

ヤバいやばいやばい、ここに居ちゃヤバい！！

頭の中で警鐘が鳴り響く。

「ルードさん、町の中心からどうやって町の外に出るんですか？」

焦りながらルードさんに聞くと、

「この避難所から地下道に繋がっているんだ。そこから町の外へ出られる」

ルードさんがそう言つた直後、悲鳴が聞こえた。

悲鳴が聞こえた方を見ると、魔物が人間を殺していた。

それを見た瞬間、俺の中の何かが弾けた。

「うおおおおおー！」

俺は叫びながら、腰に差していた刀と肩に掛けていた剣を抜き放ち、魔物たちに飛びかかった。

先頭の魔物を切り捨てるとき、他の魔物たちが俺に殺到して來た。

瞬間、全てがスローモーションで見えた。

遅い

魔物達の攻撃をかわしつつ、俺の右側から攻撃しようとしている魔物を右の刀で切り、左の剣で正面の魔物を縦に切り裂く。後方から忍び寄つて来た魔物の腹に剣を突き刺し、そのまま左側にいた魔物に叩きつけ、後ろに飛びずさつた。

直後、俺が直前までいた場所に火球が直撃した。

魔法があるのか……

思いつつ、魔法を放ってきた魔法使いみたいな姿の魔物に向かつて駆けた。

右の刀で、左の剣で、魔物を屠りながら魔法使い（魔物）に迫る。……が、そこでまた魔法が発動した。

俺は反射的に前転し、現れた風の刃を避けた。

走りながら、魔法で炎の球体を作り出し、魔法使い（魔物）に向かつて飛ばした。

魔法使い（魔物）は黒コゲになつた。

俺はそれを見向きもせずに残りの魔物を葬りに向かつた。

「はあ、はあ、はあ」

全ての魔物を倒し、俺はその場に立ち尽くした。

周りには魔物の死体……ではなく、魔物がドロップした金・素材・当たり券が散乱していた。

だが、それも俺の財布や、道具屋で買つた何でも入るカバンに勝手に入つていつた。

やがて、俺の周りにあつた物が無くなると、そこには静寂が満ちた。

町の人達は、俺に近づこうとはしない。

心配そうな顔をしたリリスが、俺の方に駆けよつて来て言った。

「大丈夫？」

俺は、リリスの顔を見て安堵した。

リリスが俺を怖がつていなかつたことに、心配してくれていて
とにうれしさを覚え、

「大丈夫だよ」

と答えようとした……が、そこで俺の意識は途絶えた。

襲撃（後書き）

戦闘の時の表現がつましくできませんでした。

誤字・脱字、感想などありましたら、連絡お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368z/>

異世界で生活するには

2011年12月25日17時50分発行